

# 研修会報告

## 2019年度 滋賀支部主催第1回資格更新研修会

### テーマ：発達障害の脳内メカニズムを考える

#### 《研修会報告》

2019年5月12日（日）、能登川コミュニティセンターにて追手門学院大学心理学部乾敏郎教授にご講演をいただきました。

先生の長年の研究成果から、最新の知見に基づき、発達障害の脳内のメカニズムについてお教えいただくとともに、発達障害の子どもたちにかかわる参加者に早速すぐに役に立つ支援方法についてお話しいただきました。

前半のミラーニューロンシステムの説明では、f-MRIがどのような仕組みで、何を測っているのかをとてわかりやすく説明されました。難しくなりがちな脳神経生理学の話も、乾先生は易しいことばも交え、理解しやすくお話しくださいました。そして「私たちが他者をどのように理解しているのか」について、①like-me システムと、②different-from-me システムの2つのシステムがあり、①によって「自他を区別せず」、「他者動作や意図を理解し」、「ミラーニューロンが他者動作を観察し、自己の運動に変換する（模倣する）」、②によって「自己と他者を切り離して考える」、「行動系列や過去の記憶をもとに考える」、「表面上には表れない意図を推定する」と考えられるとのことです。また、自閉症の子どもたちが、模倣をあまりせず、共感性も低いということについては、周りの大人や支援者が自閉症の子どもたちの行動を模倣することで共感性が増すのだそうです。今日のお話で、脳研究と照らし合わせた時に、私たちがしていること（まずは子どもの行動の模倣から）が確かに発達支援につながっていると確認できました。



後半は、自閉症の発症について神経発達科学的な仮説をご提示くださいました。神経管閉鎖時期における脳の分化、発達について詳しく説明くださり、自閉症の50%が遺伝要因、その他が環境要因ではないかとする説をご紹介くださいました。これらの研究成果から、医学的な治療方法もお示しいただきました。

全体を通じて支援者として感じたことは、脳内メカニズムについての研究が日々進んでいるなか、旧態依然とした支援を実施しているのではないかと、ということ、そうではなくとも、神経生理学的、医学的な研究成果についてもふまえながら、日々子どもへの支援を科学的に

捉え、エビデンスに基づいたかわりをしていくべきであると再認識しました。大変貴重なご講演をしていただくことができたと思います。

なお、今回の参加者は会員が61名（滋賀支部以外含む）、一般からは4名で合計65名の参加でした。

本年度も会員の皆様ならびに関係の方々にとって臨床発達心理士としてなすべきことを追究し、研修会の実施やホームページを活用した啓発活動などを行って参りたいと思います。

ご意見等ございましたら、滋賀支部までご連絡いただきますようお願い申し上げます。